

横君ハ一日視キカガキ
 休息ハ働クカ為カ、蟻尺ノ屈スルハ伸ビント欲スルカ
 為也
 〔主基督カ十二門徒ヲ遣セシトキモ彼等疲レセハ休メト命セラレタリ○去レハ休息ハ
 横着ト同視「ス」ヘキカ否、休息ハ働クカ為カ、蟻尺ノ屈スルハ伸ビント欲スルカ
 為也〕
 『新島襄全集』二卷、説教稿II・五五

〔主基督カ十二門徒ヲ遣セシトキモ彼等疲レセハ休メト命セラレタリ○去レハ休息ハ
 横着ト同視「ス」ヘキカ否、休息ハ働クカ為カ、蟻尺ノ屈スルハ伸ビント欲スルカ
 為也〕
 『新島襄全集』二卷、説教稿II・五五

新島 襄の言葉

中森 厚 (香里中学校・高等学校教諭)

この説教稿は「日時、場所不詳」となっているが、多分、
 一八八四(明治十七)年三月下旬から四月五日までの間、す
 なわち第二回欧米旅行の直前になされた説教であろうと思わ
 れる。同志社にリバイバルの靈風が吹き荒れている最中のこ
 とであった。新島はその運動に一定の距離を置きながらも、
 「此春風ヲ一吹きニ去ラシムル勿レ、此花ヲシテ一時ニ無益
 二属セシ「ム」ル勿レ」と、基本的には同志社が神と交わる
 敬虔な祈りに支えられ始めたことを評価している。この説教
 はリバイバルの嵐の中、全国へ伝道のために散っていった学

生たちへの深い思いが込められているものであった。また、
 「同志社大学設立旨趣」を書き上げ、今や明治専門学校のプ
 ラン作りで疲れ果てていた新島自身の心境でもあったであろ
 う。「伸」(働き)のためには「屈」(休息)が必要なのであ
 る。ひとり心と身体を休めて、御言葉に学び、神に祈り瞑想
 することも必要なのである。主イエスも癒しを求めて集まっ
 てくるおびただしい群集を後に、時として「人里離れた所に
 退いて祈り」(ルカ五・十五)、時には、弟子たちとも離れて
 「二人祈るために山に行かれた」(マルコ六・四五〜四六)の
 だから。この説教は今日においても目の前の山積する問題に
 翻弄されて、身も心も疲れ果てている同志たちへの深いシン
 パシーを感じさせるものである。